

〈論文〉

「西山夕陽」考
——古今集 204 番歌の解釈をめぐって——

金 中¹（西安交通大学）

Western Mountain and Setting Sun
An Interpretation on Waka No. 204 in the *Kokinshu*

Jin, Zhong (Xi'an Jiaotong University)

キーワード：古今集、藤原定家、顕註密勘、西山、夕陽

Key words: *Kokinshu*, Fujiwara no Sadaie, *Kentyumikkan*, Western Mountain, Setting Sun


要旨：「ひぐらしの鳴きつるなへに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける」という古今集 204 番歌に対し、藤原定家は『顕註密勘』において、「西山の影、夕陽のほどなき事、当時顕然事歟」と注釈を付けている。これは『毛伝』に見える「山西曰夕陽」を始めとして、「西山」と「夕陽」を巡る一連の中国詩文を背景にしたものである。そのため、この歌を夕暮の実景歌として捉えた場合、その「かげ」は「夕日の光」を意味するという解釈も成り立つと考えられるのである。

Abstract: In *Kentyumikkan* Fujiwara no Sadaie provided annotations of Waka No. 204 in the *Kokinshu* based on a series of Chinese poems related to “Western Mountain” and “Setting Sun”. Waka No. 204 is regarded as the work representing scenery at dusk, within which the word “kage” can be interpreted as “twilight at sunset”.

原稿受理日（2017-10-02）

査読後掲載決定日（2017-11-06）

日本研究教育年報. 2018, Vol.22, pp110-128. ISSN 2433-8923

¹  本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

はじめに

題しらず

ひぐらしの鳴きつるなへに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける¹

(古今集・秋上・204・よみ人しらず)

という歌に対する藤原定家の密勘には、示唆に富んだ注釈が確認できる。本稿はその密勘の意味と、背景となる中国文学を探る。また、それに基づいてこの歌に新たな解釈を与え、そこに登場する「かげ」という言葉が「夕日の光」と解釈可能であることを指摘したい。

一、古今集 204 番歌の今日の解釈と疑点

今日の古今集の注釈では、掲出歌は例えば、

^{ひぐらし}
蛸が鳴きはじめるとともに、暗くなって日が暮れてきたな、と思ったら、ここまで歩いてきた私が、ちょうど山の陰に入っただけだった、それを夕暮と錯覚したのだ。

(奥村恆哉『新潮日本古典集成 古今和歌集』、新潮社、1978)

ひぐらしが鳴きはじめたのにつれて、「日暮らし」の名のとおり、日が暮れてしまった。そう思ったのは、気づいてみれば山の陰だったよ。

(中略)「ひぐらし」という事物の名から、掛詞的な連想によって導き出された「日暮らし」という概念が、山の陰になっている場所では日暮前でも日を遮られるという現実の事態で覆されたことを趣向としたものである。類型的な発想を前提としながら、その類型を裏切るような観念と現実との背反や乖離が、この歌の眼目でもある。

(小町谷照彦「古今和歌集評釈・百四十九・ひぐらしの鳴きつるなへに」、『国文学解釈と教材の研究』第40巻7号、1995)

などのように、基本的に、作中主体がひぐらしの鳴き声に「夕暮」になったと感じたが、実際にはまだ日が暮れておらず、ただ「山の陰」に入っただけで、錯覚に気付いた歌として解釈されている。この錯覚説に従えば、この歌はまだ夕暮にならないうちの、つまり、午後のある時点のものとして捉えられる。しかし、

題しらず

ひぐらしの声聞く山の近けれや鳴きつるなへに入り日さすらん

(後撰集・秋上・254・紀貫之)

という歌からは、一つの疑点が浮かんでくる。この貫之の歌は古今集 204 番歌と時代的に近く、明らかにそれを踏まえて作ったものであり、そこに歌われた現象と理由を逆にし、「入り日さす」という眼前の実景から、ひぐらしの鳴き声の聞こえる山が近いからだろう

と推量している。古今集 204 番歌も夕暮の実景を歌ったものとして、貫之が理解していたと考えられよう。

ひぐらしは万葉集では「日晚」「日晚之」などといった、漢語において夕暮の意味を指す語に表記され、もともと「夕暮に鳴く虫」という観念が強く、平安以降、「日暮らし」も掛けられるようになっている。²

新羅に遣はされし使人等別れを悲しみて贈答し、海路に及びて情を働めて思ひを
陳べき。所に当たりて誦ひし古歌を並せたり
夕さればひぐらし来鳴く生駒山越えてそ我が来る妹が目を欲り
(万葉集・卷十五・3589・秦間満)

題しらず
ひぐらしのなく山ざとの夕暮は風よりほかに訪ふ人もなし
(古今集・秋上・205・よみ人しらず)

などのように、山のひぐらしの鳴く時間帯が明示される万葉・古今時代の歌はほぼ夕暮に限定されている。

山寺にまかりける暁にひぐらしの鳴き侍ければ
あさぼらけひぐらしの声聞ゆなりこや明けぐれと人の言ふらん
(拾遺集・雑上・467・藤原済時)

という、一見、暁に山寺で鳴くひぐらしを歌う特殊の作品も、遊戯的に「明け暮れ」という言葉の語源を説明したものであり、正にひぐらしが夕暮に鳴く虫である観念を下敷きにしている。従って、古今集 204 番歌はひぐらしが実際に鳴いた以上、時間的にはすでに夕暮になっている、と考えるのも自然のように感じられる。

二、定家の密勘と古今集 204 番歌の本文の問題

古今集 204 番歌は夕暮の実景を歌っているニュアンスが強いという疑点を解決する上に、古今集の古注釈には重要な手掛かりが提供されている。

承久三年(1221)成立の歌学書『^{けんちゅうみつかん}顯註密勘』は、六条家の顯昭の「古今秘注抄」の部分に、御子左家の藤原定家が家説を「密勘」として付け加えた部分からなっている。そこにおいて、古今集 204 番歌に対する顯昭の注の部分は、

日ぐらしとは、ちいさき蟬也。夕つかた鳴也。なきつるなへにとは、鳴つるからにと
いふ也。

となっており、ひぐらしが夕暮に鳴く小さい蟬であること、歌の第二句の「鳴きつるなへに」が「鳴きつるからに」の意味であることを指摘している。それに続く定家の密勘の部

分は、

西山の影、夕陽のほどなき事、当時顕然事歟。家の本には、と思へば山のとぞかき侍。

となっており、極めて注目に値する。

まず、その冒頭の「西山の影」という表現である。これは言うまでもなく、古今集 204 番歌の「山の陰」の表現に対応しているが、歌に見える「山」が「西山」と、方角が「西」に限定され、また、「陰」の字が「影」となっている。

ここで、204 番歌の本文に見える「かげ」の表記を確認すると、古今集の諸伝本ではそれがほとんど単に「かけ」の仮名となっており、³ 冷泉家時雨亭文庫蔵藤原定家嘉禄二年自筆本では漢字の「影」となっている。つまり、この「かげ」の漢字は必ずしも「陰」とは限らず、「影」の可能性もある。

また、密勘の後半の「家の本には、と思へば山のとぞかき侍」という指摘は、古今集 204 番歌の第四句が俊成本では「と思へば山の」となっていることを示している。今日、普通「と思ふは」となっているこの第四句の表現は極めて異本が多い。

古今集の伝本では、「とおもふは」（貞応二年本・関戸本・昭和切・永暦本・建久本・嘉禄本・伊達本）、「とおもへは」（私稿本）、「とみしは」（雅経筆本崇徳天皇御本・前田家本・天理図書館本）、「とみれは」（筋切本・元永本・伏見宮本・家長本・永治本）といった分布である。また、静嘉堂文庫蔵為相本は「とおもへは」として「ふイ」と傍記し、卷子本と六条本は「とみしは」として、それぞれ「オモヘ」と「おもへイ」と傍記している。⁴

古今集の古注釈では、藤原教長の『古今集註』は「トミレバ」となっており、顕昭の『古今集註』は「とみつれば」である。『顕註密勘』は、『日本古典文学影印叢刊』では「見し」を消して「とおもへは」と傍記され、久曾神昇編『日本歌学大系 別巻五』所収の本文では「とみえしは」となっており、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』所収の本文では「とみしは」となっている。

大別すれば、古今集 204 番歌の第四句の本文は「思ふ」の系列（「思ふは」「思へば」）と「見る」の系列（「見しは」「見えしは」「見れば」「見つれば」）に分かれる。定家自身もこの箇所についてかなり揺れがあったらしい。俊成から「と思へば」の本文が伝授され、『顕註密勘』において一時的に六条家の本文の「と見しは」を使い、後の古今集書写の段階においては「と思ふは」に改めた、というおおよその経路が考えられよう。

ちなみに、古今集 204 番歌は『古今和歌六帖』4007 番歌と『猿丸集』28 番歌としても収められ、前者の本文は「とみえしは」であり、後者は「とおもへば」である。

この第四句の本文の違いは後述するように、「山のかげ」の「かげ」を「陰」か、それとも「影」と採るかという問題にも絡んでいる。

三、中国文学における「西山夕陽」の系譜

密勘の前半の部分に戻るが、「歟」は疑問の語気を表し、「当時^{けんぜん}顯然事歟」は「当時顯然たる事か」と訓み、「その時には明らかなことではないか」の意味になる。「西山の影、夕陽のほどなき事」とは何を意味するのか、ここで、まずはっきりさせる必要がある。傍点の付いた漢語表現から、「山西^し曰^い夕陽^し」という中国の觀念が想起される。

中国文学において、「夕陽」という語の最初の用例は『詩經』・「大雅」の「公劉」に見える、

度其^は夕陽^か、幽居^{ひん}允荒^{きよまこと} 其の^{おほい}夕陽^はを度り、幽の居允に荒なり
に遡る。『毛伝』はそれに対し、

山西曰夕陽 山西なるを夕陽と曰ふ
と注している。また、『爾雅』・「釈山」には、

山西曰夕陽、山東曰朝陽 山西なるを夕陽と曰ふ、山東なるを朝陽と曰ふ
の箇所があり、「暮乃見日」（暮れに乃ち日を見る）と「注」が付けられ、「疏」には、「日即陽也。夕始得陽、故名夕陽」（日即ち陽なり。夕なれば始めて陽を得たり、故に夕陽と名づく）と詳しく説明され、「公劉」の句が引かれている。

つまり、山の西側は夕暮時に日が当たるため、「夕陽」と呼ばれるわけである。「公劉」に見える「夕陽」は、後の一般的な「夕日」の意味ではなく、専ら「山の西側」の代名詞として使われている。

但し、定家の密勘に見えるのは「西の山」を意味する「西山」という漢語であり、「山の西側」を意味する「山西」ではない。「西山」と「山西」は極めて類似するが、語順が逆であり、意味も異なる。

ここで、中国文学における「西山」と「夕陽」を巡る表現の系譜を概観する。

朝発軻於蒼梧兮	朝 ^{じん} に軻 ^{さうご} を蒼梧に発し
夕余至乎峴園	夕 ^よ に余 ^{けんぼ} 峴園に至る
欲少留此靈瑣兮	少 ^{しばら} く此 ^{れいさ} の靈瑣に留らんと欲すれば
日忽忽其將暮	日 ^{こつこつ} は忽忽として其れ將に暮れんとす
吾令羲和弭節兮	吾 ^{ぎくわ} 羲和 ^{せつ} をして節 ^{とど} を弭めて
望崦嵫而勿迫	崦嵫 ^{えんじ} を望んで迫る勿からしむ

掲出したのは『楚辞』の「離騷」に見える高名な段落である。「吾」は天地を縦横する旅人であり、夕暮「縣圃」（崑崙山上の神の園）に到着する。夕日を「崦嵫」（日の入る山）に近づけさせないようにと、「羲和」（太陽の御者）に車を止めよと命令する。屈原は「山に迫る夕日」のイメージに、人生の「老い」を象徴している。⁵

漢・揚雄が屈原を悼む「反離騷」という賦において、

臨汨羅而自隕兮	^{べきら のぞ いん} 汨羅に臨みて自ら隕じ
恐日薄於西山	^{せいざん せま} 日の西山に薄るを恐る

と、前掲の「離騷」の表現を踏まえながら、「崦嵫」という固有名詞をより平易な「西山」に置き換え、「日の西山に薄る」と、生命の衰微を象徴している。⁶

つまり、中国文学では早くも山と夕日の関連が注目され、「山西日夕陽」と「日薄西山」の表現が生まれている。前者は『詩経』の「公劉」を濫觴に、「夕陽」が「山西」の代名詞として使われるのに対し、後者は『楚辞』の「離騷」を濫觴に、夕日が「西山」に迫ることによって生命の衰微を象徴している。両者は夕日の実景を描写するものではないが、根源的にはいずれも、夕日が山にかかるという典型的な夕暮の風景に由来している。「山西」と「西山」との細かい違いは別にし、夕日との関連においては、山の方角が「西」であることが共通している。⁷

白日半西山	^{なか} 白日西山に半ばし
桑梓有余暉	^{さうしよ き} 桑梓余暉有り

王粲「從軍詩五首 其三」

驚風飄白日	^{けいふう ひるがへ} 驚風は白日を飄し
忽然帰西山	^{こつぜん} 忽然として西山に帰る

曹植「贈徐幹」

など、建安時代から、実景としての「西山にかかる夕日」の描写が登場するようになってくる。⁸以降、

彷徨四顧望	^{はうくわう よも こぼう} 彷徨して四に顧望すれば
白日入西山	白日西山に入る

楊方「合歡詩五首 其三」

白日淪西阿	^{おか しず} 白日西の阿に淪み
素月出東嶺	素月東の嶺に出づ

陶淵明「雜詩 其二」

歡樂未窮已	^{くわんらく きはま や} 歡樂未だ窮り已まず
白日下西山	白日西山に下る

皇太子簡文「雜題二十一首 遊人」

一身為輕舟	^{けいしう} 一身輕舟と為る
落日西山際	^{きは} 落日西山の際

常建「西山」

亭脊太高君莫坼	ていせきはなは ^さ 亭脊 太 だ高きも君坼くこと莫れ
東家留取当西山	とうか ^あ 東家留め取つて西山に当つ
好看落日斜銜処	好看に好し落日の斜めに銜む ^{ふく} 処
一片春嵐映半環	いつぺん ^{しゅんらんはんくわん} 一片の 春 嵐 半 環 に映ず

白居易「和元八侍御升平新居四絶句 高亭」

などのように、「西山にかかる夕日」の風景が次第に多く詩材化されていく。これに伴い、

夕陽度西嶺	^{せいらい わた} 夕陽西嶺に度る
群壑倏已暝	^{ぐんえいしゆく} 群壑 倏 として已に暝し ^{くら}

孟浩然「宿業師山房期丁大不至」

西山多奇状	西山奇状を多くし
秀出倚前楹	^{ぜんえい} 秀出して前楹に倚る
停午收彩翠	^{てい ご さいすい} 停午彩翠を收め
夕陽照分明	夕陽分明として照らす

孟浩然「遊明禪師西山蘭若」

猿不見兮空聞	猿見ずして空しく聞こゆ
忽山西兮夕陽	^{こつ} 忽として山西は夕陽たり

王維「送友人歸山歌 其二」

西嶺名夕陽	^{なづ} 西嶺を夕陽と名け
杳曖留落暉	^{えうあい らくき とど} 杳曖にして落暉を留む

白居易「裴侍中晉公以集賢林亭即事詩三十六韻見

贈。猥蒙徵和。才拙詞繁。輒廣為五百言以伸酬獻」

などの詩句は、「山西曰夕陽」の觀念を踏まえながら、「山にかかる夕日」の実景を詠っている。この場合、「夕陽」の言葉が「山西」のほか、「西山」や「西嶺」などの語とも共起するようになり、「山西」と「西山」との細かい区別は特に拘らなくてよいと思われる。

「西山の影、夕陽のほどなき事」という定家の密勘は、「山西曰夕陽」を始めとして、「西山」と「夕陽」を巡る一連の中国詩文の表現を背景にしており、内容的に「夕日が西の山にかかる」という夕暮の風景に関連すると思われる。

四、古今集 204 番歌に対する密勘の意味

「夕日が西の山にかかる」という夕暮の風景は、極めて典型的かつ普遍的なものと言ってよい。日本古典文学におけるその描写として、高名な『枕草子』の初段が直ちに想起される。

秋は、夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥の、寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ、三つなど、飛びいそぐさへ、あはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさくみゆるは、いとをかし。日入りはてて、風のおと、虫の音など、はたいふべきにあらず。

この段落は夕暮の始まりから、「日入りはて」た夕暮の終りまでの一連の風景を、時間の軸に沿って展開しており、傍線部分は夕日が射して西山の稜線に接近する風景を描いている。⁹和歌では、

大秦わたりに大輔が侍りけるに、つかはしける
限りなく思ひ入り日のともにのみ西の山べをながめやるかな
(後撰集・恋四・879・小野道風)
(相模の「二月十五日の暮れ方に、伊勢大輔がもとにつかはしける/つねよりもけふの煙のたよりにや西をはるかにおもひやるらん」という歌に対する)返し
けふはいとど涙にくれぬ西の山おもひ入り日のかげをながめて
(新古今集・釈教・1974・伊勢大輔)

などは、「思ひ入り」と「入り日」を掛けながら、西の山にかかる夕日を歌っており、二首目には夕日の光を意味する「かげ」という言葉が見える。

暮るる年
山の端に夕日さしつつ暮れゆくは春に入りぬる年にざりける (貫之集・416)
晩恋といへる心をよめる
逢ふことをこよひと思はば夕月日入る山の端もうれしからまし
(金葉集・恋下・427・源雅定)

三月尽の心をよみ侍ける
入り日さす山の端さへぞうらめしき暮れずは春のかへらましやは
(千載集・春下・126・源雅通)

などは「山の端」にかかる夕日を歌っており、その「山」は言うまでもなく、「西」の方角である。

定家の歌に、次の二首が注目される。

述懐
さまざまに春のなかばぞあはれなる西の山の端かすむ夕陽に (拾遺愚草・1595)

遅日
ながめわびぬ光のどかにかすむ日に花咲く山は西をわかねど (拾遺愚草・811)
一首目は「西の山の端」に霞む「^{ゆふひ}夕陽」の風景を歌っている。二首目も「霞む」という

動詞を使って夕日の光を修飾しており、「花の咲く山は西の方角を識別しないが」という機知的な発想は、やはり夕日と西の山との密接な関連を下敷きにしている。

日中双方の文学における「夕日が西の山にかかる」という夕暮の典型的な風景についての一連の描写を考察した上で、特に新古今集 1974 番歌と定家自身の二首の詠作を参照して考えると、「西山の影、夕陽のほどなき事」という定家の密勘に見える「影」は、「(西の山にかかる) 夕日の光」を指していると判断されよう。

『国語大辞典』(小学館、1981)によると、「^{せきよう}夕陽」には、「①ゆうひ。いりひ。斜陽。②ゆうぐれ。夕方。③老年・老境のたとえ。④山の西側。また、西」といった意味があり、「ほどなし」には、「①隔たりが少ない。遠くない。高くない。②狭い。奥行きがない。小さい。③時間がいくらかたたない。まもない。④年若い。⑤卑しい。身分がとるに足りない」といった意味がある。つまり、日本語における「夕陽」の語には「夕日」のほか、単に「夕暮」という時間的概念を指す用法もあり、この点、漢語における「夕陽」の語とは異なっている。また、「ほどなし」の語は、空間的に近いことも、時間的に近いことも指し得るのである。

「西山の影、夕陽のほどなき事、当時顕然事歟」という定家の密勘は幾らか言葉足らずであり、「西山の影」と「夕陽のほどなき事」の間の接続関係はあまり明瞭ではないが、前者は古今集 204 番歌の「山のかげ」に、後者はその「日は暮れぬ」の部分にそれぞれ対応することは明らかである。この密勘の表現を、一応「西の山に夕日の光がかかり、間もなく夕暮になることは、その時には明らかなことではないか」と通釈してみる。つまり、定家は古今集 204 番歌が、西の山にかかる夕日の光を見た夕暮の実景歌として読んだことが窺われる。

密勘のこの指摘は、ほかの古今集の古注釈にも引用されていた。

古今集寂恵本の勘記は、「西山ノ影、夕陽ノホドナキ事、当時顕然歟。カヤウノツバキ不可好詠云々」となっている。但し、密勘に見える「当時顕然事歟」の「事」の字が抜けており、また、「カヤウノツバキ不可好詠」という表現は密勘には見えない。古今集 204 番歌のような機知的な歌い方をあまり好んで詠んではいけない、ということを目指していると考えられる。

飛鳥井雅俊の注釈書と伝える『古今栄雅抄』は、「定家云。西山の^{せきよう}陰。夕陽の程なき事。当時^{たうじけんぜん}顕然に侍る事歟。家の本には。とおもへば山のと書侍り。源氏に。かごとがましき虫の声とあるは。日晩也。日ぐらしは夕暮になく物なれば。入日の影そふ山に。すゞしきこゑをきゝ。心すむよしをよめり」となっている。密勘に見える「西山の影」(但し、「影」の字を「陰」と誤写)を「入日の影そふ山」と一層明瞭に解釈し、これもひぐらしは夕暮

に鳴く虫であるとの立場に立っており、古今集 204 番歌を夕暮時に、山にかかる夕日の光を目にしなが、ひぐらしの爽涼感ある鳴き声を聴いた際の、心澄んだ気持ちを歌ったものだと指摘している。

なお、北村季吟の『八代集抄』（山岸徳平『八代集全註』第一・二巻、有精堂、1960）はほぼ『古今栄雅抄』のままであり、但し、「入日の影そふ山に」の部分が「入日のかげろふ山に」となっている。「そ」と「ろ」の変体仮名が類似するため、『古今栄雅抄』の「そ」が「ろ」に誤解されて書写されたと考えられる。「入日の影そふ山」とは夕日が山に接近するという、まだ明るい夕暮の始まりの段階であり、「入日の影ろふ山」だと夕日が翳って間もなく夜に入るとい、夕暮の終りの段階になる。

五、和歌における「山のかげ」の詠作状況

以上、定家の密勘の背景及びその意味を調べてみた。では、古今集 204 番歌は果して山にかかる夕日の光を詠うものとして読めるだろうか。それを明確にするには、和歌における「山のかげ」の詠作状況をなお考察する必要がある。

「かげ」という言葉は、実に多義的である。『国語大辞典』（小学館、1981）によると、「影」と「陰」はもともと語源が同じであり、「影」は「景」とも表記され、「①日、月、星や、ともし火、電灯などの光。②鏡や水の面などに物の形や色が映って見えるもの。③目に映ずる実際の物の姿や形。④心に思い浮かべた、目の前にいない人の姿。おもかげ。⑤物体が光をさえぎった結果、光と反対側にできる、その物体の黒い形。投影。影法師。⑥それにいつも付き添っていて離れないもの」といった意味があり、一方、「陰」は「蔭」や「翳」とも表記され、「①物にさえぎられて光線または風雨などの当たらないところ。②物のうしろ。後方。③人目につかない、隠れた場所。表立たない所。また、その人の居合わせない場所。④人や物事の恩恵。また、助力したり守ってくれたりする人。めぐみ」といった意味がある。

ここでまず、万葉集に現れた「かげ」という語の意味と使用状況を筆者なりに表 1 にまとめた。¹⁰

表 1：万葉集における「かげ」の意味と使用状況

意味	歌表現（括弧内は歌番号とその漢字表記を示す）
日の光	「影」（317 陰）、「かげ」（4469 可気）「朝日影」（495 朝日影）、「影面」（52 影友）、「御陰」（52 御蔭・御影）、「朝影」（2394 朝影、2619 朝影、2664 朝影、3085 朝影、3138 朝影、4192 朝影）、「夕影」（1622 夕影、2104 暮陰、2157 暮

	影、2159 暮陰、4290 暮影)
月の光	「影」(1295 陰、2462 影、2821 影、3250 影、3658 可気、4060 可気)
灯火の光	「かげ」(2642 陰)
水の面に映った形	「影」(1435 陰、1714 影、3225 影、3807 影、4512 可気、4199 影)、「磯影」(4513 伊蘇可気)
面影	「影」(2462 影)「面影」(2642 面影、2900 面影、3137 面影、3138 面影)
姿	「影」(4054 可気)、「影」(4181 影)
光を遮って出来た 暗い部分	「陰」(1099 陰)、「山陰」(375 山影、1416 山影、1875 山陰)、「常陰」(1470 常影、2156 跡陰)、「岩陰」(791 磐影)、「島陰」(1719 嶋陰、3620 之麻可気、4412 之麻可気)、「松陰」(1654 松影、1687 松影、2653 松陰、4271 松影)、「山松陰」(3655 夜麻末都可気)、「水陰」(2862 水陰)、「水陰草」(2013 水陰草)、「影草」(2159 影草)、「夕陰草」(594 暮陰草)、「草陰」(3192 草陰)、「夏影」(1278 夏影)

重出した歌も計算に入れると、「(日・月・灯火の) 光」を表す歌が計 23 首、「光を遮って出来た暗い部分」を表す歌が 21 首数えられる。便宜上、以下では後者の意味を「暗い陰」と略称する。万葉集ではこの相反する二つの意味を表す歌が最も多く、ほかには「水の面に映った形」が 7 首、「面影」が 5 首、「姿」が 2 首という分布である。

「かげ」という語の最も基本的な意味はやはり「日の光」であり、この点、単に「朝」「夕」という時間名詞が「かげ」と複合した場合、「かげ」はそのまま「日の光」を意味することに典型的に現れている。「朝影」¹¹や「夕影」という複合語形以外、「かげ」が「光」の意味を表す場合は、

山部宿祢赤人の不尽山を望みし歌一首

.....駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影^{かく}も隠らひ
照る月の 光も見えず..... (万葉集・巻三・317・山部赤人)

田部忌寸櫛子の、大宰に任ぜられし時の歌四首 (そのうちの一首)

朝日影にはへる山に照る月の飽かざる君を山越しに置きて

(万葉集・巻四・495・田部忌寸櫛子)

栗田女王の歌一首

月待ちて家には行かむ我が挿^させるあから橘^{たちばな}影に見えつつ

(万葉集・卷十八・4060・栗田女王)

灯火^{ともしび}のかげ^あにかがよふうつせみの妹が笑まひし面影に見ゆ

(万葉集・卷十一・2642・作者未詳)

などのように、「日」「月」「灯火」を示す言葉と共起していることが特徴である。

一方、「暗い陰」の意味を表す場合は、ほとんど「岩陰」「島陰」や「松陰」「草陰」のような複合語形であり、単独の「かげ」がこの意味を表す歌は、

岳を詠みき

片岡のこの向つ峰に^{むか}榎^を蔭^{しひ}かば今年の夏の陰にならむか

(万葉集・卷七・1099・作者未詳)

という一首のみであり、そこには「榎」という植物関連の表現が現れている。

湯原王の、芳野にして作りし歌一首

吉野なる夏^{なつみ}実の川の川よどに鴨そなくなる山陰にして(万葉集・卷三・375・湯原王)

刀理宣命^{とりのせんりやう}の歌一首

もののふの磐瀬^{いはせ}の杜^{もり}のほととぎす今も鳴かぬか山^{とかげ}の常陰に

(万葉集・卷八・1470・刀理宣命)

鹿鳴を詠みき

あしひきの山^{とかげ}の常陰に鳴く鹿の声聞かすやも山田^も守らす兒

(万葉集・卷十・2156・作者未詳)

などのように、「山の暗い陰」を表す場合、「山陰」という複合語形あるいは「山の常陰^{とかげ}」を使っており、「山のかげ」という表現ではない。また、「かげ」の使用について注目されるのは、

我妹子や我を思はばまそ鏡照り出づる月の影に見え来ね

(万葉集・卷十一・2462・作者未詳)

のように、「影」の語に「(月の) 光」と「(我妹子の) 面影」の意味を重ねたり、

年も経ず帰り来なむと朝影^{あさかげ}に待つらむ妹し面影に見ゆ

(万葉集・卷十二・3138・作者未詳)

灯火のかげ^あにかがよふうつせみの妹が笑まひし面影に見ゆ

(万葉集・卷十一・2642・作者未詳)

などのように、「朝日の光」を意味する「朝影」や「(灯火の) 光」を意味する「影」が「面影」の言葉と同時に現れたり、「かげ」の語の多義性が意識的に活かされている。

つまり、「かげ」という語は万葉集では、「光」と「暗い陰」という相反する意味がすでに確立されており、また、一つの「かげ」の語に複数の意味が掛けられたり、一首の歌に「かげ」の語が二回繰り返されたりなど、その多義性が活かされている。

「かげ」の語が多義的であるため、その万葉集における漢字表記と実際の意味は必ずしも一致しない場合がある。¹² 同じように、後世の歌に見える「かげ」の語の意味を決めるには、その漢字表記の如何は決定的な証拠にはならないことを留意すべきである。

平安以降、古今集に見える次の古歌がまず注目される。

常陸歌

筑波嶺のこのもかのものに影はあれど君が御^みかげにますかげはなし

(古今集・東歌・1095・よみ人しらず)

この歌では「筑波嶺」との関連で「かげ」の語が三回繰り返され、その多義性が十分に活かされている。最初の「影」と表記されるものと三つ目の「かげ」は「陰」のことであり、「山の木蔭」を意味している。二つ目の「かげ」は「影」のことであり、「面影」や「姿」を意味している。以降、「君が御かげ」という表現が「天子の恩恵」を指すようになり、元来恋歌であったこの東歌は宮廷貴族用のものに変えられ、相当高名な歌として、古今集の仮名序と真名序に「遍き御慈みの浪、八洲の外まで流れ、広き御^{おほむめぐ}恵^{かげ}みの陰、筑波山の麓よりも繁くおはしまして」と「仁流秋津洲之外、惠茂筑波山之陰」と引用されたほどである。

八代集では、「山のかげ」という表現が古今集 204 番歌以外、七首の歌に現れている。

親王宮の帯刀に侍りけるを、宮仕へ仕う奉らずとて、解けて侍りける時に、よめる

筑波嶺の木のもとごとに立ちぞよる春の^{かげ}み山の陰をこひつつ

(古今集・雑下・966・宮道潔興)

延喜御時、御屏風に

夏山の影をしげみやたまほこの道行く人も立ちどまるらん

(拾遺集・夏・130・紀貫之)

一条院の御時、初めて松尾の行幸侍りけるに、うたふべき歌つかうまつりけるに
ちはやぶる^{まつのを}松の尾山のかげ見ればけふぞ千歳のはじめなりける

(後拾遺集・雑六・1168・源兼澄)

寛平八年関白前太政大臣高陽院歌合に、祝^{かやのあん}の心^{いはひ}を
よろづ代を^{かやのあん}松の尾山のかげしげみ君をぞ祈るときはかきはに

(新古今集・賀・726・康資王母)

一首目は、前掲の「筑波嶺」の東歌を踏まえ、「陰」が「木蔭」を指すと同時に、「春宮（皇太子）の恩恵」も指している。二首目は貫之による藤原定国四十賀屏風歌であり、その「かげ」が「木蔭」を指すと同時に、賀意が籠り、「恩恵」の意味も含まれている。なお、定家は貞応本系統の写本においてこの「かげ」に「影」の字を用いているが、「陰」と表記するのが普通である。三・四首目はともに松尾大社と関連して「松の尾山のかげ」という表現を使っており、その「かげ」が「木蔭」を指すと同時に、神の加護や御世の繁栄の意味も暗示している。この四首に見える「かげ」は「恩恵」や「加護」の意味を掛けながら、主に「木蔭」を意味しているが、その際に「木」「松」や「しげみ」といった植物関連の表現と共起している点、前掲した万葉集 1099 番歌とも共通している。

題知らず

桜花三笠の山の蔭しあれば雪と降れども濡れじとぞ思ふ

（拾遺集・雑春・1056・よみ人しらず）

家に百首歌よみ侍りける時、神祇の心を

天の下みかさの山のかげならで頼むかたなき身とはしらずや

（新古今・神祇・1897・藤原兼実）

法輪寺に住み侍けるに、人の詣で来て、暮れぬとて急ぎ侍ければ

いつとなき小倉の山のかげを見て暮れぬと人のいそぐなる哉

（新古今・雑中・1645・道命）

この三首では、「山のかげ」の前に出てくる山の名前が働いている。一首目は「三笠」から連想され、「蔭」が「風雨などの当たらないところ」を意味している。二首目は一首目を踏まえながら、その「かげ」には三笠山の春日明神の加護も暗示している。三首目は、いつでも暗い小倉の山を見て日が暮れたという錯覚を歌っており、その「かげ」は「暗い陰」を意味しているが、「小倉」には「小暗」が連想されることと大きく関連している。

以上の七首に見える「山のかげ」という表現では、「かげ」は主に「暗い陰」を意味しているが、それがいずれも植物関連の表現や特定の山の名前との組み合わせによって支えられたものである。文脈次第、「山のかげ」が別の意味になることも可能である。例えば、

太上天皇御書下預時歌

ひんがしの国にわがをれば朝日さすはこやの山の影となりにき（金槐和歌集・681）

という私家集の歌は「題しらず／寄るべなみ身をこそとほくへだてつれ心は君が影となりにき」（古今・恋二・619・よみ人しらず）という古歌を踏まえており、「はこやの山」とは仙洞御所、つまり、太上天皇のことである。そこに見える「山の影」はその前の「朝日さす」との関連で、「山の影法師」が基本意であり、更に、「庇護」の意味も掛けられている。

る。¹³

このように見ると、平安以降の「山のかげ」という歌表現は多義的であり、それを決めるのは歌の内部文脈である。「かげ」は「木蔭」を指すものが多いが、文脈によって、「恩恵」や「庇護」、更に「影法師」などを指す可能性もあり、「山のかげ」は無条件的に複合語形の「山陰」の意味とは限らない。

六、古今集 204 番歌の二とおりの解釈

古今集 204 番歌の問題に戻るが、これは詠み人知らずの作品であり、前掲した八代集の「山のかげ」の歌より時代的に早いものである。それ以前の万葉集においては、「かげ」の語意がすでに分化され、日・月・灯火の表現と共起する場合は「光」を意味し、植物関連の表現と共起する場合は「暗い陰」を意味している。

前述したように、「山のかげ」という表現の意味は、主に歌の内部文脈によって決まる。古今集 204 番歌の表現に即して見ると、最後の「にぞありける」は「にいた」ではなく、「であった」の意味である。上句は「ひぐらしが鳴き始めると同時に日が暮れた」と歌っており、下句は上句に述べた現象の理由を「山のかげであった」と簡潔に述べている。全体的に、「山のかげ」の意味を限定できるほどの明確な文脈は乏しい。よって、その「かげ」を「光」と「暗い陰」の両方の意味に採られると考えられる。

通説のように、この歌を夕暮の錯覚とし、「かげ」を「暗い陰」の意味に採るのは勿論成立するのである。¹⁴ 典型的な解釈として、金子元臣『古今和歌集評釈』（明治書院、1908）は「（釈）一首の意は、山里に来てみれば、日を暮らすという名の、蛸の鳴いたにつれて、いつの間にか、はや日は暮れたと思ふは、間違ひにて、木深き山の陰故サ、闇いのであったワイとなり。（評）緑樹晝猶暗き山陰は、即ち、茅蛸の常に鳴く處なれば、この虫の名に因みて、一趣向を立てたるなり」と述べている。古今集 204 番歌の本文には植物関連の表現は出て来ないが、その「山」を「木深き山」と想像するのも、間違いとは言い難い。

一方、この歌を夕暮の実景とする解釈も同時に成立するのではなかろうか。「日は暮れぬ」という三句目は玩味すべきである。その「日」の語は普通、古今集の先行注釈のように、「一日」という時間的概念としているが、実は空間的実体としての「太陽」の意味にも捉えられ、三句目が全体的に夕日の風景表現になる。前掲した「かげ」が「日の光」を意味する万葉集 317・495 番歌を参照して分るように、古今集 204 番歌では「日は暮れぬ」との組み合わせにより、「かげ」は「影」のことであり、「（山にかかる夕日の）光」としても解釈される。そうであるならば、この歌は作中主体がひぐらしの鳴き声を聴いて「日暮らし」と連想させると同時に、山にかかる夕日の光を目撃し、夕暮の訪れを聴覚と視覚の両

方において捉えたものと言えよう。「ひぐらしが鳴きはじめると同時に日が暮れてきた。そのように感じたのは、ちょうど山に夕日の光がかかっているからだなあ」と口語訳する。

この歌の解釈は、前述した第四句の本文の問題とも微妙に絡んでいる。どちらかと言うと、「思ふ」の系列（「思ふは」「思へば」）は脳中の判断のニュアンスが強く、夕暮の錯覚説に相応しく、一方、「見る」の系列（「見しは」「見えしは」「見れば」「見つれば」）は眼前の印象を描写し、夕暮の実景説に相応しい。特に「見しは」という本文では、「日が暮れた」のはすでに目撃した眼前の風景となり、実景説としては最も適切な表現と考えられよう。¹⁵ 定家は密勘の時点において「見しは」の本文を採り、古今集 204 番歌を西山にかかる夕日の光を見た夕暮の実景歌として読んでいる。但し、後の古今集書写の段階では「思ふは」の本文に戻り、「西山の影」云々について新たな発言をしなかった。

夕暮の錯覚説と実景説はともに成立するが、両者を比べると、古今集 204 番歌を実景説として解釈したほうが、本稿の最初に述べた「ひぐらしが実際に鳴いた以上、時間的にはすでに夕暮になっている」という疑点が氷解してくる。また、正に貫之の後撰集 254 番歌は、古今集 204 番歌を夕暮の実景歌として読んだからこそ、そこに歌われたひぐらしの鳴く現象と、夕日の光が山にかかるという理由を逆にし、夕日が射している現象から、ひぐらしの鳴く山が近いという理由を機知的に歌ったのである。

ひぐらしの鳴きつるなへに日は暮れぬと思ふは山の影にぞありける（古今集 204 番歌）
ひぐらしの声聞く山の近けれや鳴きつるなへに入り日さすらん（後撰集 254 番歌）

古今集 204 番歌に対し、古来から錯覚説と実景説の二通りの読みの存在が窺われる。

藤原教長の『古今集註』は「ヒグラシトハ、ムシノナハリ。コレガナクニ、ヒノクレヌトミツレド、ヤマノカゲナリケリトヨメルナリ」と述べており、簡略ではあるが、「日の暮れぬと見つれど」という逆接表現から、古今集 204 番歌を夕暮の錯覚として解釈している。前掲した「小倉の山」を歌った新古今集 1645 番歌も錯覚説に基づいてそれを踏まえたのである。

なお、『源氏物語』の「夕霧」帖にも、「日入りかたになりゆくに、空のけしきもあはれに霧りわたりて、山の蔭は小暗きこちするに、ひぐらし鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子の、うちなびける色もをかしう見ゆ」という描写が見える。これは古今集 204 番歌を夕暮の実景としながら、その「山のかげ」を「山の蔭」として物語の世界を再構成している。

「西山の影、夕陽のほどなき事、当時顕然事歟」という定家の密勘は『古今栄雅抄』と『八代集抄』にも引用され、古今集 204 番歌を解釈する上で重要な手掛を提供しているにもかかわらず、今日に至るまでの長きに渡り、ほとんど注目されなかった。

契沖『古今余材抄』（『契沖全集』巻八、岩波書店、1973）は拾遺集 467 番歌「あさばら

けひぐらしの声聞ゆなりこや明けぐれと人の言ふらん」を挙げ、ひぐらしは朝から鳴くものもあると述べた後、「陰にぞ有けるとは、誠にくれはてたるにはあらで、山陰なれば暮れたるやうなりとなり」と述べており、そこに主張される夕暮の錯覚説は後の古今集の注釈に多大な影響を与えている。前述したように、拾遺集 467 番歌は遊戯的な歌であり、この特殊な例を以ってひぐらしが夕暮以外の時間にも鳴くことの説明とするのは無理のように思われる。

近代以降の古今集の諸注釈書はほとんど古今集 204 番歌の「かげ」を無条件的に「暗い陰」として認定しているが、「山のかげ」は必ずしも複合語形の「山陰」とは限らないこと、また、「日は暮れぬ」という表現が夕日の風景としても理解され得ることを見逃し、更に、肝心な「西山の影、夕陽のほどなき事」という密勘の意味を全く追求せず、結局、この歌の解釈が不完全になってしまったと言わざるを得ない。

但し、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』だけは『山のかげ』は『山の影』（西日によってできる山の影）とも解せるが」と述べており、前掲した『源氏物語』の「夕霧」帖の描写を引用し、そこにおける表現が「山の蔭」であることを理由に、古今集 204 番歌もやはり「山の蔭」と解すべきであると主張している。「かげ」は「影法師」の可能性もあることが示唆された点、注目に値するが、『源氏物語』における受容の状況だけを以って、古今集 204 番歌の意味を判断するのは問題である。

まとめ

以上の考察結果の要点をまとめると、次のようになる。

(一) 古今集 204 番歌に対する「西山の影、夕陽のほどなき事、当時顕然事歟」という藤原定家の密勘は、「西の山に夕日の光がかかり、間もなく夕暮になることは、その時には明らかなことではないか」という意味であり、これは『毛伝』に見られる「山西曰夕陽」を始めとして、「西山」と「夕陽」を巡る一連の中国詩文を背景とするものである。定家自身の詠作などを参照した結果、この密勘に確認できる「影」は「(西の山にかかる) 夕日の光」を指し、定家はこの歌を夕暮の実景歌として読んだこと。

(二) 古今集 204 番歌を全体的に踏まえた貫之の歌には、「入り日さす」という夕日の実景描写が見えること。

(三) ひぐらしはもともと夕暮に鳴く虫であり、古今集 204 番歌はひぐらしが実際に鳴いた以上、時間的にはすでに夕暮になっていると考えることが自然であること。

(四) 万葉時代から「かげ」という語は多義的であり、「日（太陽）」を表す言葉と共に用いる場合、「光」を指すことが多く、古今集 204 番歌の三句目である「日は暮れぬ」の

「日」は単なる時間的概念ではなく、空間的実体としての「太陽」の意味にも捉えられること。

以上の諸点から、古今集 204 番歌を夕暮の実景歌として、その「かげ」を「夕日の光」の意味とする解釈は、この歌が夕暮の錯覚を歌ったものであり、その「かげ」が「暗い陰」を意味するとした従来の通説と共に成り立つものと考えられる。

末筆であるが、和歌の作品を研究する際に、その背景となる中国文学を究明することは、和歌の解釈を行う上での基礎を与え、今まで見過ごされて来たことも発見できるのである。古今集 204 番はこうした日中比較文学的な視点の重要性を、改めて示している。

注

- (1) 本稿で引用する和歌の本文は主に『新日本古典文学大系』（岩波書店）により、作者名は実名表記にした。拾遺愚草は久保田淳『訳注 藤原定家全歌集』（河出書房新社、1985）による。枕草子と源氏物語の本文は『新潮日本古典集成』（新潮社）による。『顕註密勘』の本文は久曾神昇編『日本歌学大系 別巻五』（風間書房、1981）により、『日本古典文学影印叢刊 22 顕註密勘』（日本古典文学会、1987）も参照し、句読点は竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（右文書院、1976）所収の『顕註密勘』の翻刻による。藤原教長『古今集註』、古今集寂恵本の勘記と『古今榮雅抄』は竹岡正夫の同書から引用した。中国詩文の本文と訓読は主に『新釈漢文大系』（明治書院）により、『毛伝』と『爾雅』は『十三経注疏』（中華書局、1980）から引用し、唐詩は『全唐詩』（中華書局）による。なお、必要に応じて筆者なりに訓読を付け加えたものがあり、また、傍点はいずれも筆者の施したものである。
- (2) 詳しくは、佐々木民夫「ひぐらしの歌」（『万葉研究』第 12 号、1991）を参照。
- (3) 久曾神昇編『古今和歌集総覧』（改訂版、書芸文化新社、1989）に見える流布本の貞応二年本は漢字の「陰」となっているが、西下経一・滝沢貞夫編『古今集校本』（笠間書院、1977）ではそれがやはり仮名の「かけ」となっている。
- (4) 西下経一・滝沢貞夫編『古今集校本』、久曾神昇編『古今和歌集総覧』及び三木麻子「『顕註密勘』と定家の和歌表現」（片桐洋一『王朝文学の本質と変容 韻文編』、和泉書院、2001、618 頁）による。
- (5) 「言己誠欲少留於君之省閣以須政教、日又忽去、時將欲暮、年歳且尽、言己衰老也」（王逸注）。
- (6) 晋・李密「陳情表」に見える「但以劉日薄西山、氣息奄奄。人命危淺、朝不慮夕」という表現は揚雄「反離騷」を踏まえている。
- (7) 漢語の「西」や日本語の「にし」及び印欧語族における「西」を意味する言葉は、その語源がいずれも「日没」という自然現象に由来する。詳しくは、宇佐美斉「日ノ^ニ往シ方」（『落日論』、筑摩書房、1989）を参照。
- (8) その最初の作例は、王粲「七哀詩」に見える「山岡有餘暎、岩阿増重陰」という、山に掛かる夕日の残光を表現するものである。詳しくは、森博行「魏・晋詩における『夕日』について」（『中国文学報』第 25 冊、1975）を参照。
- (9) 『枕草子』初段の傍線部分について解釈が分かれる。「夕日」は「射す」と「山の端近うなる」の両方に掛かるのが通説である。島津久基「枕草子短観——山の端いと近くなりたるに」（『文学』第 6 巻第 9 号、1938）はそれに対し、「夕日」を「射す」までかかるものとし、「山の端」を「近うなる」の主語と見なし、全体は「山が夕日に照し出されて近く見える」意味として解釈している。田中重太郎「『山の端いと近くなりたるに』の解」（『枕冊子研究』、古典文庫、1952）は文法的解釈及び「山の端近く」という成句の用例から、通説の妥当性を唱え、萩谷朴『枕草子解環』（同朋

舎、1981）は枕草子初段の構文の立場から通説を支持し、今日では、通説の解釈はほぼ定着している。なお、佐藤武義「上代語『日暮』『夕暮』考」（『桜文論叢』第 51 巻、2000、13 頁）は、太陽が山の端に近づくという通説では京都の街がまだ明るく、「秋の夕暮」の典型的な風景としては相応しくないことを理由に、依然として新説を支持しているが、「夕暮」はもともとある幅を持つ時間帯であり、夕日が山に接近するというまだ明るい時刻は、正に「夕暮」の始まりの段階として位置付けられよう。

- (10) 「かげ」という語は上代では本来、「光」と「赤系列の色彩」が未分化の状態であった。一方、漢語の世界では、太陽の光を分析的・対比的に捉え表現する傾向が存在しており、光によって覆われる現象として「景」「影」を位置付け、光によって覆い隠される現象として「陰」「蔭」を位置付けた。和語の「かげ」はこうした漢字の世界に出会い、漢字を用いて表記するという作業の結果が、中国語としての語彙体系の分析的・対比的な視点が導入され、意味分化の現象が起こった。詳しくは、吉田比呂子『「かげ」の語史的研究』の第一章（和泉書院、1997）を参照されたい。なお、同書では吉田氏は万葉集の「暗い」影の意味をあまり認めず、「かげ」の意味が「隠されて光を遮り暗い部分」に傾きを見せ始めるのは中古から中世にかけてであると主張しているが、筆者は「かげ」の意味分化が万葉時代においてすでに確立されたと考えている。
- (11) 万葉集の中に登場する「朝影」という言葉について、諸注釈書は「朝の影法師のように痩せている」や「朝の薄い光のように弱々しい」などと解釈しているが、吉田比呂子『「かげ」の語史的研究』（21-22 及び 259-316 頁）は詳しい考察を行うことで、それを「恋焦れた様子で朝の赤味を帯びた光の空間の中で、赤く映え染まりながら思う人を待っている、または去って行く人を追慕するそんな絵画的な情景」（21 頁）と指摘し、新たな解釈を打ち出している。
- (12) 吉田比呂子『「かげ」の語史的研究』（287 頁）が指摘したように、例えば、万葉集 375・791・1278・1654・1416 番歌では「陰」の意味を表すには「影」の漢字を使っており、逆に、317・1295・2642 番歌では「影」の意味を表すには「陰」の漢字を使っている。
- (13) 金槐和歌集 681 番歌の「影となりにき」という表現には、「身に添う影のように相手の身に従い離れないこと」、「自分がはこやの山に陰を作ることになってしまったこと」、また、「庇護をうけること」といった解がある。小島吉雄は一つ目の「影法師」の説を採っており、三つ目の庇護の説では「みかげ」というべきであることを理由に、その説を採らない立場にある（詳しくは、風巻景次郎・小島吉雄『日本古典文学大系 山家集 金槐和歌集』、岩波書店、1961、422 及び 443-444 頁を参照）。しかし、前掲の拾遺集 130 番歌、新古今集 726・1897 番歌などから、「山のかげ」が「庇護」や「恩恵」の意味を表す場合、その「かげ」は必ずしも「みかげ」と表現しなくてもよいわけである。この歌では、「かげ」には「影法師」と「庇護」の意味が両方成立すると考えられよう。
- (14) 唐・王維「送李太守赴上洛」の詩に「板屋春多雨、山城昼欲陰」と、山にある城が昼でも翳ろうとすることを述べ、唐・祖詠「蘇氏別業」の詩に「竹覆経冬雪、庭昏未夕陰」と、まだ夕暮にならないうちに、もう翳ってしまうという別業の庭の閑寂とした風景を詠っており、いずれも錯覚説の解釈に基づく古今集 204 番歌と共通する発想が見られる。
- (15) 小沢正夫『日本古典文学全集 古今和歌集』（小学館、1975）は『「と見しは」がいちばん論理的であるが、他のどれでもだいたい同意義である』と述べており、「思う」と「見る」の系列の大別に対する認識は見られない。

【付記】本稿は、2010 年度中国中央高校基本科研業務費専項資金資助項目「藤原定家古典詩歌中的中国文学影响」及び 2013 年度中国国家社科基金項目「日本古典和歌黄昏意象比較研究」における成果の一部として、執筆されたものである。また、和漢比較文学会第 6 回特別例会（2013 年 8 月 31 日、於西安賓館）で行った口頭発表を基に訂正加筆したものである。御教示を賜った諸先生方に心より御礼申し上げる。